「生卵の恨み」　（２０１２）

我々の小・中学生時代は戦後間もない頃でまだ生活の苦しさ・混乱の残っている時代であり、今の飽食の時代からは想像も出来ないだろうが何よりも「甘さ」に餓えていた、学校から帰ると、台所の棚の上にある砂糖壷に指を突っ込んでひと掬い舐めていたのを思い出す。又あの頃の「ねじり飴」、「カステラ」、「亀の甲煎餅」、「森永・カバヤ・グリコキャラメル」は本当に美味しかった。チョコレートなる物もまだ出始めた頃で、幼稚園の遠足に母が買ってくれた「チューブ入り搾り出しのチョコレート」の旨さは夢のように美味しかった。中学に入ると昼の弁当を持参する事になった。何となく大人になったような気分だった、冬になるとその弁当を暖房用の大きなストーブにかざして暖かく食べた。ところが僕の弁当には時々麦飯が入っていて恥ずかしい思いに苛まれた。小さな村の銀行の支店長の息子だったから、別に貧乏だった訳ではないだろうが、たまらなく寂しく、家に帰って母親に散々文句を言った覚えがある。母親は何食わぬ顔をして、ガリガリに痩せていた僕の栄養の事を考えて・・と言っていた。時々白米だけの「真っ白い弁当」の時もあったが、蓋を開けた瞬間のあの輝かしさの感動を未だに忘れられないでいる。その弁当にどんなおかずが入っていたのか全然憶えていないが、卵焼きのあの色と美味しさは格別だった。僕の母の作る卵焼きには砂糖が入っていた。

中学３年の時だか？市内の英語弁論大会があり僕は学校代表で出場し、山陰の町から山を越えて山陽の町での県大会に出場した、大会の朝、「咽喉が良くなるから・・・」と、付き添いの先生から生卵を飲まされた事がある。戦後の貧しさの未だ残っている時代の我々にとって「生卵」はまだ貴重品だった。

ところで結婚した妻の卵嫌いに気が付いたのは結婚後何年も経てからの事だった。実際は生卵だけが全く駄目で、加工した卵は大丈夫だった。（生卵は気持ち悪いという）。

さて長女が大学生の時、何かの合宿の時、朝食に生卵が出て、周りの友達が、皆ご飯にその生卵をかけて食べていたのを見てひっくり返る程ビックリしたそうだ。それよりも、この時まで「卵かけご飯」を知らなかったという娘に、皆がそれ以上にビックリしたそうだ。親の何気ない刷り込みというのは恐ろしい。

定年になり家に居ることが多くなると昼食はいつも妻の手作りで、大抵麺類（ラーメン・スパゲテイー・蕎麦・うどん）や焼き飯等だが、うどんの時が大変だ。月見うどんは勿論の事、肉うどんの時でさえ僕には生卵は欠かせない、いつも自分で冷蔵庫から卵を1個取り出しうどんに掛ける、これが妻には耐えられないらしい、そしてとうとう、うどんには卵が必要・・・と勘違いしてその内、うどんにゆで卵の半切りが乗っ

かるようになった。「卵はこれでどうでしょうか」と言う事らしいが、僕にとっての「うどんに卵」・・という意味と全然違う、そうは言ってもこの上から更に生卵を掛けるのは我慢してそのまま食べ続けている・・・いつも妻の勝ちである。おそらく死ぬまで「生卵入りうどん」、「生卵ぶっ掛け飯」は食べられないのだろうと思う

足るを知る慎(つつ)ましき日の木の芽和え

肩書きは無し湯豆腐を突(つつ)くのみ

筍飯(たけのこ)　父譲りなる味音痴

焼き芋で犬とひととき母と嫁

夏めきて門司の海辺の焼きカレー

赦(ゆる)し合い二人暮らしの鍋つつく

湯豆腐や夫婦のこころ重ならず

鰤大根　目玉は我の皿にあり

妻食べぬ酢牡蠣山盛り夕餉かな

差し向かう妻と素麺啜りけり

父囲みはらから集い雑煮食う

嫁の作る父の好物　鯛の汁

蜆汁　箸確かなる呆けの父

身につきし父のエプロン鮎を食う

鰤大根せせる確かさ父の指

病みてなお匂い確かや栗ご飯

老いてなお母の豆飯父生かす

ふるさとの母の畑の豆ご飯

雑煮食い　父母また一つ老いにけり

豆茹でる変わらぬ母は卒寿なり

惚けの父健啖続く豆ご飯

洟みずを拭き拭き啜る蜆汁